

【原著】

A 大学の基礎看護学実習における学生の実習前後の
ストレス対処力とソーシャルサポート平賀元美, 大西幸恵
名古屋学芸大学看護学部

抄録

目的: 本研究は基礎看護学実習前後の学生の Sense of Coherence (SOC) およびソーシャルサポートの変化から、教育的介入の示唆を得ることを目的とする。

方法: 研究方法は、基礎看護学実習2を行った105名を対象とし、2020年1~2月の実習前後にSOC-13日本語版を用いて首尾一貫性と、片受らが開発した「新大学生のためのソーシャルサポート尺度」を実施した。研究者所属の研究倫理審査委員会の承認を得た。

結果: 有効回答数72名(68.6%)であった。SOC合計は、実習前 51.74 ± 8.44 (平均 \pm 標準偏差)、実習後 53.65 ± 9.19 で実習後に1.91増加した。実習前と後のSOC合計で有意差が認められた($P=0.045$)。ソーシャルサポート合計は、実習前 64.13 ± 9.87 、実習後 63.97 ± 9.74 で実習後に0.16減少した。SOCとソーシャルサポートは実習前 $r=0.241$ 、実習後 $r=0.357$ とやや相関があった。

結論: ストレス対処能力を向上させるためには評価的サポートを高める教育が必要である。

緒言

看護学実習は、学生が学士課程で学修した教養科目、専門基礎科目の知識を基盤とし、専門科目としての看護の知識・技術・態度を統合、深化し、検証することを通して、実践へ適用する能力を修得する授業である¹⁾。看護学教育においては、看護実践力を養ううえで看護学実習(以下実習)は不可欠である。A大学では、1年次より基礎看護学実習1を行って病院内の環境理解や患者とのコミュニケーションを図ることで看護学を学ぶ動機づけとしている。さらに、看護を学ぶ上で基礎となる看護過程の展開を通して看護実践を行う基礎看護学実習2を2年次後期に行い、看護学の専門分野における学習を進める基盤づくりを期待している。

実習は、患者との関わりを通して看護を学ぶため、看護の喜びや楽しさを学ぶ場であるとともに、学生自身の知識、技術の未熟さを自覚する場でもある²⁾。そのため、実習前には教師は学習準備を促し、学生自身も学習課題だけでなく不足な点や強化したい技術などの自己学習を行う。それでも、学生は、実習が学内とは異なりリアルな臨床現場であることによる緊張や、指導を受ける教員や指導者、さらにはグループメンバーなどの人的環境により、学生自身の知識や技術以外の要因でもストレスを受けている³⁻⁵⁾といえる。

ストレス状況にある学生に必要なものとして、健康社会学者 Antonovsky の提唱する Sense of Coherence (首尾一貫感覚; SOC) がある。首尾一貫

感覚とは自分の生きている世界は首尾一貫している、納得できる、腑に落ちるという感覚のことである。SOCはストレス対処・健康生成力の概念として示されている⁶⁾。これは、極めてストレスフルな出来事や状況に直面させられながらも、心身の健康を害さず守れているばかりか、それを成長や発達の糧にさえ変えて元気に生きている人々の中に見出した、人生における究極の健康要因であるとしている⁷⁾。このSOCは、3つの確信の感覚、直面する問題に説明がつけられる把握可能感、問題に対処できるという処理可能感、直面する問題は意味があるとする有意味感からなる。

縦野らは、基礎看護学実習における看護学生のストレス対処能力の変化として、実習前後でSOCが有意に低下し、この要因として「看護過程の展開」と「実習前のSOC値の値」の2つを同定している⁸⁾。また、米田らは、実習前後でのSOCに変化はないとしながらも、把握可能感、有意味感について上昇しているとしている⁹⁾。山中らも実習開始から実習終了までの複数回での調査において、SOCに有意な変化はない¹⁰⁾としている。実習での学生のSOCについては、対象者数と調査のタイミングとで結果に違いがあるといえるが、学生が実習で看護記録や看護過程の展開に取り組むことが、SOCの変化に影響していることがわかる。実習は、学内での講義、演習を経て臨地での看護実践力を身につける第一歩である。本研究で、実習での学生のSOCを把握することは、学生のストレス対処能

力が確認できるとともに、実習での教育的介入の示唆が得られると考える。

ストレス対処に影響を及ぼすものとしてソーシャルサポートがある。ソーシャルサポートは、ストレス緩和やメンタルヘルスを良好に保つうえで有効である¹¹⁾。ソーシャルサポートの定義については、「特定個人が、特定の時点で、彼/彼女と関係を有している他者から得ている、有形/無形の諸種の援助」¹²⁾という定義が、比較的一般的に用いられている。

学生にとっては、教育的介入もサポートの一つであるが、実習におけるストレスとして指導者やグループメンバーとの人間関係などの要因が明らか⁵⁾となっており、学生は教育的介入を必要なサポートとして認識しているとは限らないことを意味している。山中らはストレスの高い実習であっても、ストレス対処力の高い学生は、生活を整え心身の状態を維持し、周囲からのサポートを得て実習に臨んでいる¹⁰⁾としている。A大学における基礎看護学実習において、どのようなソーシャルサポートが必要であるか、また、実際に受けているソーシャルサポートについて、学生がどのように受け止めているかについては明らかにすることは、必要な教育的介入を見出すことにつながる。

実習の中でも初めて看護過程を展開して看護実践を行う実習は、学生にとって期待とともに緊張するものである。看護実践力を身に着けるうえで必要な実習を、学生が学ぶ楽しさを感じながら過ごすためには、学生自身のストレス対処力が維持されてメンタルヘルスが健康に保たれていることやその学生を支えるソーシャルサポートが有効に働いていることが必要である。本研究でソーシャルサポートの実態を確認することで、SOCの実態を踏まえての教育的介入の視点を明確にできると考える。

そこで、A大学における基礎看護学実習2を体験する学生について、実習前の学生の準備状態と実習中のSOCとソーシャルサポートの実態を明らかにし、ストレス対処能力を高める教育的介入への示唆を得ることを目的とする。

ストレス対処能力について、SOC-13の下位項目は「直面した出来事や問題を把握しその後を予測する、問題解決につなげる、出来事をポジティブにとらえ、自己を再度とらえなおす」と、変化の激しい実習において学生に求められる首尾一貫性などを包含しており、本研究の目的と合致していると考え採用した。また、ソーシャルサポートについて

は、教育的介入をサポートとして位置づけて調査するうえで、評価的支持を項目に加えている片受らの大学生用ソーシャルサポート尺度を採用した。

さらに、実習前には実習の期待度とSOCおよびソーシャルサポートとの関連、実習直後の実習満足度とSOC及びソーシャルサポートとの関連を明らかにする。これによって、学内における看護技術や看護過程の展開にかかわる授業での教育や実習オリエンテーションを含めた実習前後に必要な関わりやサポートに関する示唆が得られると考える。

研究方法

1. 研究対象

(1) A大学看護学部の2020年2月に基礎看護学実習2を体験した学生105名を対象に、実習前と実習終了後に無記名の自記式質問紙調査(実習前後は符号による連結をしている)を行った。

(2) A大学の基礎看護学実習2の概要

2年次後期に行う2単位、90時間の臨地実習で、患者を受け持ち看護過程の展開を行って対象者の基本的欲求に基づく日常生活援助を行うことを目的とする実習である。実習施設は複数あり、1病棟に教員1名、学生5名程度で実習する。

2. 調査時期

2020年1~2月。

3. 調査内容及び方法

(1) 実習前の調査

実習前のデータ収集は、初回の実習オリエンテーション実施時に実習目標、実習内容等の説明を行い、事前学習課題を提示した後で、かつ実習前2週間~1か月での調査とした。調査内容は、①基本属性:性別、家族との同居の有無、②実習に向けての準備としての学習時間(座学、技術練習)、③実習に対する期待度(100%のうち何%か)、④SOC-13日本語版(7件法)、⑤学生用ソーシャルサポート尺度(4件法)である。

(2) 実習後の調査

実習後は、実習終了面接を終え記録提出をした後、その日のうちに調査を行った。調査内容は、①基本属性:実習中の家族との同居の有無、②実習中の自宅での学習時間、③実習中の睡眠時間、④実習体験の満足度(100%のうち何%か)、⑤SOC-13日本語版(7件法)、⑥学生用ソーシャルサポート尺度(4件法)である。

(3) SOC-13日本語版によるストレス対処力の調査

SOCとは、具体的にはストレスサーに対し以下の三つの処理を行う力とされている。すなわち、第1に直面した出来事や問題を把握しその後を予測する、第2に首尾よくストレス対処資源を動員し問題解決につなげる、第3に直面した出来事をポジティブにとらえ、自己を再度とらえなおすこと⁸⁾である。このSOCは、3つの確信の感覚、把握可能感、処理可能感、有意味感からなる。把握可能感とは自分の日常生活や人生において直面する問題が何に由来するかについて納得いく説明がつけられる、理解できるという感覚であり、処理可能感はそうした問題に対し自分の内外にある対処資源を動員でき、その問題を対処できるという感覚である。有意味感とは、自分が直面する問題には、たとえつらく大変に思えることでも取り組みがいや立ち向かいがいがあり意味があるものだという感覚である⁹⁾。SOCの日本語版については、29項目の日本語版尺度、さらに13項目からなる短縮版が作成されている⁶⁾。

本研究での調査では、SOCの13項目による日本語版を使用した。Antonovskyが開発し山崎らによって翻訳されたもので信頼性および妥当性の検証がされている¹³⁾。日本語版SOC-13のCronbachの α 係数は、0.72~0.89の報告がある⁶⁾。項目によって表現は異なるが「まったくなかった」から「いつもそうだった」などの7件法によるもので、合計得点は13~91点の値をとる。下位尺度である把握可能感は5項目5~35点、処理可能感は4項目4~28点、有意味感は4項目4~28点の値をとる。13項目中5項目は逆転項目のため点数を反転させて合計し、点数が高いほどストレス対処力が高いと判断する。

(4) 片受らの学生用ソーシャルサポート尺度による調査

ソーシャルサポートは、そのサポート内容の観点からソーシャルサポートの内容を、信頼、共感、愛などが与えられる情緒的サポート(emotional support)、レジャーや余暇活動の時間を一緒に費やし、社会的友好をもたらす、所属的サポート(companionship support)、問題を理解してくれる人から、アドバイスや指示を与えられて処理する際の助けとなる、情理的サポート(informational support)、必要なサービスの提供や、金銭的、物質的援助をしてくれる道具的サポート(instrumental support)、肯定、フィードバック、社会的比較などから、尊重され受容されているという情報をもたらしてくれる評価的サポート(appraisal support)の

5つに分類している¹⁴⁾。この5つの内容を考慮し、片受らが評価的サポート、情報・道具的サポート、情緒・所属的サポートについての尺度を作成している¹⁵⁾。これは、大学生を対象とするもので、抑うつ、不安の提言に対して有効に作用するとしている¹⁶⁾。

学生用ソーシャルサポート尺度は片受らの開発したものを使用した^{14,15)}。尺度の信頼性は、3つの下位尺度ごとにCronbachの α 係数について、「評価的サポート」は0.94、「情報・道具的サポート」は0.88、「情緒・所属的サポート」は0.87である¹⁴⁾。これは、20項目からなり、「まったくない」から「非常にあてはまる」までの4件法によるもので、合計得点は20~80点の値をとる。下位項目は、評価的サポート6項目6~24点、情報・道具的サポート7項目7~28点、情緒・所属的サポート6項目6~24点の値をとる。いずれも点数が高いほどソーシャルサポートがあると判断する。

(5) 質問紙回収方法

実習オリエンテーションの前に、実習に直接かわからない研究者が文書を用いて口頭で研究協力の依頼説明を行った。その際、科目責任者など成績にかかわる研究者は、説明等には参加はしていない。研究の目的と趣旨等を記した説明文と研究同意撤回書、調査票を配布した。回収は、所定の場所に設置した鍵付きの回収箱に投函する形で行った。

4. 倫理的配慮

実習を体験する学習者が研究協力者であるため、実習オリエンテーションとは別の時間に、そして、実習に直接かわからない研究者が文書を用いて口頭で研究協力の依頼説明を行った。また、科目責任者など成績にかかわる研究者は同席せず、学生に強制力が働くことをできるだけ排除して、研究の趣旨、自由意志による参加であり拒否ができること、成績に関与しないこと、調査票は無記名であるが記入者のみがわかる5桁の番号をつけることで実習前後の連結を行うこと、研究協力を辞退するときは番号で申し出が可能であること、調査票への回答をもって研究協力への同意とみなすことを説明した。

研究協力者は回答した質問紙を封筒に入れて封をし、研究室とは離れた所定の場所に設置した鍵付きの回収箱に投函した。

なお、本研究は研究者所属の研究倫理審査委員会の承認(No.430)を得て実施している。

5. データ分析方法

回収された調査票のうち、実習前後の連結が可

能であり、欠損値がないものを分析対象とした。IBMの統計ソフトSPSS (Ver.28) を使用した。

(1) 記述統計量と正規性の確認

すべてのデータについて記述統計量を確認し、学習時間、睡眠時間、実習の期待度、実習の満足度、SOC及びソーシャルサポートについては Shapiro-Wilk 検定によりデータの正規性を確認した。正規性が認められたのは、SOCのみであった。

(2) 実習の期待度と実習前の学習時間、SOCおよびソーシャルサポートの関連について

目的変数である実習期待度と従属変数である学習時間、SOCおよびソーシャルサポートの関連について Spearman 順位相関検定をおこなった。

(3) 実習後の満足度と学習時間、SOC及びソーシャルサポートとの関連について

目的変数である実習満足度と従属変数である学習時間、SOC及びソーシャルサポートの関連について、Spearman 順位相関検定をおこなった。

(4) 実習前後の比較

SOC、ソーシャルサポートの実習前後の比較をみるため、SOCについてはt検定、ソーシャルサポートについては Wilcoxon 順位検定、Mann-Whitney U 検定をおこなった。

結果

1. 対象者の概要

対象者105名のうち、実習前及び後の回収数101名(回収率96.1%)、そのうち連結可能で欠損のない有効回答数72名(有効回答率68.6%)であった。女性63名(87.5%)、男性9名(12.5%)、実習前の家族と同居62名(86.1%)で、実習中の家族と同居56名(77.8%)であった。

2. 実習前の学生の準備状態

実習前の学習時間は2.5±2.0(平均±標準偏差)時間/日、技術練習時間は6.5±8.1時間/週であった。実習前の実習期待度は49.5±18.7ポイントであった。

実習前の期待度と学習時間について、実習の期待度の高さや学習時間の長さについてやや相関が認められた(Spearman 順位相関係数, $r=0.325$) (表1)。また、SOCとソーシャルサポート尺度間についてもSOCの値とソーシャルサポートの高さにやや相関が認められた(Spearman 順位相関係数, $r=0.241$) (表2)。

実習前の家族の同居と実習前のソーシャルサポートを比較したが、有意な差は認められなかった。

表1. 実習前の期待度と学習時間、SOCとソーシャルサポート尺度の関係(n=72)

		学習時間 /日	実習前 SOC合計	実習前ソーシャル サポート尺度合計
実習の期待度	相関係数	0.325**	0.087	0.020
	有意確率	0.005	0.466	0.866

平均±標準偏差, ** $P<0.01$

表2. SOCとソーシャルサポートの関係(n=72)

	SOC合計	ソーシャルサポート合計	相関係数
実習前	51.74±8.44	64.13±9.87	0.241*
実習後	53.65±9.19	63.97±9.74	0.357**

平均±標準偏差, * $P<0.05$, ** $P<0.01$

表3. 男女別にみたSOCの実習前後の得点(n=72)

	実習前		実習後	
	男(n=9)	女(n=63)	男(n=9)	女(n=63)
SOC合計	53.11±10.03	51.54±8.27	52.67±5.50	53.79±9.63
把握可能感	19.00±4.44	18.76±4.50	19.00±3.61	19.68±4.71
処理可能感	14.89±2.89	16.13±3.37	16.11±2.47	16.71±3.88
有意味感	19.22±4.87	16.65±3.21	17.56±2.40	17.40±2.80

平均±標準偏差

3. 実習中の学生の学習時間、実習満足度とSOC及びソーシャルサポート

実習中の学習時間は4.2±1.3時間/日、睡眠時間は4.2±1.3時間/日であった。実習後の満足度は77.1±20.3ポイントであった。

実習後の満足度と実習中の学習時間、睡眠時間、実習後SOC、実習後ソーシャルサポートについて関連を確認したが、有意な相関は認められなかった。実習後SOCと実習後ソーシャルサポートについて、実習後のSOCの値と実習後のソーシャルサポートの高さにはやや相関が認められた(Spearmanの順位相関係数, $r=0.357$)。

実習後の満足度の中央値による上位群と下位群の比較を行ったが、学習時間、睡眠時間、実習後SOC、実習後ソーシャルサポートいずれも有意な差は認められなかった。

実習中の家族の同居と実習後ソーシャルサポートを比較したが、有意な差は認められなかった。

4. 実習前後のSOC、ソーシャルサポート

(1) SOC

SOC合計は、実習前51.74±8.44で実習後53.65±9.19であり、実習前と比べて実習後は1.91ポイントの上昇がみられた。男女別については、実習前と比べて実習後に上昇したのは、男性(n=9)の処理可能感1.22ポイント、女性(n=63)のSOC合計2.25ポイント、把握可能感0.92ポイント、処理

表4. ソーシャルサポート尺度の実習前後の項目別得点(n=72)

	実習前	実習後	有意確率
SOC合計	51.74±8.44	53.65±9.19	0.045*
把握可能感	18.79±4.47	19.60±4.57	0.095
処理可能感	15.97±3.32	16.64±3.72	0.107
有意味感	16.97±3.52	17.42±2.74	0.204
1)あなたは、自分の周りで起こっていることがどうでもいい、という気持ちになることがありますか。	3.72±1.27	3.90±1.52	0.292
2)あなたはこれまでに、よく知っていると思っていた人の思わぬ行動に驚かされたことがありますか。	4.15±1.31	3.99±1.14	0.329
3)あなたは、あてにしていた人ががっかりさせられたことがありますか。	4.06±1.46	4.13±1.36	0.873
4)今まで、あなたの人生は、とても明確な目標や目的があった。	4.43±1.39	4.53±1.22	0.283
5)あなたは、不当な扱いを受けているという気持ちになることがありますか。	4.39±1.47	4.83±1.38	0.056
6)あなたは、不慣れた状況の中にあると感じ、どうすればよいのかわからないと感じることがありますか。	3.31±1.69	3.47±1.44	0.222
7)あなたが毎日していることは、つらく退屈である。	4.28±1.21	4.31±0.90	0.615
8)あなたは、気持ちや考えが非常に混乱することがありますか。	3.85±1.34	3.99±1.37	0.433
9)あなたは、本当なら感じたくないような感情を抱いてしまうことがありますか。	3.72±1.42	4.03±1.64	0.075
10)どんな強い人でさえ、時には「自分はダメな人間だ」と感じることもあるものです。あなたは、これまで「自分はダメな人間だ」と感じたことがありますか。	2.65±1.40	2.69±1.39	0.011*
11)何か起きたとき、ふつう、あなたは、適切な見方をしてきた。	3.76±1.05	4.13±1.05	0.005**
12)あなたは、日々の生活の中で行っていることにほとんど意味がない、と感じることがありますか。	4.54±1.50	4.68±1.21	0.537
13)あなたは、自制心を保つ自信がなくなることがありますか。	4.88±1.37	4.72±1.49	0.492

平均±標準偏差, *P<0.05, **P<0.01, 把握可能感; 2), 6), 8), 9), 11), 処理可能感; 3), 5), 10), 13), 有意味感; 1), 4), 7), 12)

表5. ソーシャルサポート尺度の実習前後の項目別得点(n=72)

	実習前	実習後	有意確率
ソーシャルサポート合計	64.13±9.87	63.97±9.74	0.726
評価的サポート	18.43±3.43	18.88±3.19	0.123
情報・道具的サポート	21.94±3.92	22.21±3.90	0.310
情緒・所属的サポート	20.56±3.13	19.61±3.34	0.012*
1)あなたの成果に感謝してくれる	3.07±0.68	3.18±0.64	0.207
2)問題解決方法についてアドバイスをしてくれる	3.08±0.69	3.13±0.77	0.687
3)あなたの個人的な話を聞いてくれる	3.39±0.70	3.25±0.67	0.067
4)あなたの努力や心がけを労わってくれる	3.19±0.70	3.28±0.63	0.319
5)どうしたらよいかを助言してくれる	3.08±0.75	3.14±0.70	0.564
6)気分転換に付き合ってくれたり、遊びに連れて行ってくれる	3.43±0.75	3.19±0.68	0.019**
7)あなたの行いや努力を評価してくれる	3.21±0.65	3.28±0.59	0.297
8)わからないことがあるときに、教えてくれる	3.19±0.70	3.21±0.73	0.883
9)一緒に遊びに出かけてくれる	3.51±0.71	3.15±0.80	0.001**
10)あなたの努力や心がけに感謝してくれる	3.10±0.61	3.13±0.60	0.725
11)あなたに必要な情報を与えてくれる	3.17±0.65	3.19±0.72	0.763
12)あなたの気持ちを落ち着かせてくれる	3.22±0.72	3.28±0.63	0.581
13)他者の前であなたを評価してくれる	2.82±0.79	2.92±0.75	0.242
14)決心がつかないときに、アドバイスをしてくれる	3.15±0.69	3.24±0.66	0.221
15)一緒にいて楽しい時間を過ごしてくれる	3.54±0.56	3.39±0.70	0.048*
16)あなたの成果を評価してくれる	3.17±0.71	3.25±0.67	0.239
17)新しいことを学びたいときに教えてくれる	3.08±0.73	3.04±0.74	0.670
18)あなたの悩みやグチを聞いてくれる	3.46±0.71	3.35±0.73	0.215
19)あなたに期待してくれる	3.07±0.70	3.13±0.65	0.394
20)あなたが間違ったときに指摘してくれる	3.18±0.76	3.26±0.63	0.329

平均±標準偏差, *P<0.05, **P<0.01, 評価的サポート; 1), 4), 7), 10), 13), 16), 19), 情報・道具的サポート; 2), 5), 8), 11), 14), 17), 20), 情緒・所属的サポート; 3), 6), 9), 12), 15), 18)

可能感 0.58 ポイント, 有意味感 0.75 ポイントであった。実習前は, SOC の合計, 把握可能感, 有意味感は男性のほうが女性よりも高く, 実習後は, 男性が女性よりも高いのは有意味感のみであった (表 3)。

実習前後の SOC 合計得点は, 実習後が有意に高得点であった (t 検定, $P=0.045$) (表 4)。把握可能感 0.81 ポイント, 処理可能感 0.67 ポイント, 有意味感 0.45 ポイントといずれも実習後に上昇がみられた。具体的な項目で実習前後に有意な差がみられたのは, 処理可能感を示す「あなたは, 自分はダメな人間だと感じたことがありますか」(t 検定, $P=0.011$), 把握可能感を示す「何か起きた時, ふつう, あなたは適切な見方をしてきた」(t 検定, $P=0.005$) であった。

(2) ソーシャルサポート

ソーシャルサポート合計は実習前 64.13 ± 9.87 で, 実習後は 63.97 ± 9.74 であり, 0.16 ポイントの下降がみられた。下位尺度については, 実習後に上昇したのは評価的サポートが 0.45 ポイント, 情報・道具的サポートが 0.27 ポイントであった。実習後下降したのは, 情緒・所属的サポートで 0.95 ポイントの下降があった (Mann-Whitney U 検定, $P=0.012$) (表 5)。具体的な項目で実習前後に有意な差が認められたのは, 情緒・所属的サポートの 3 項目「気分転換に付き合ってくれたり, 遊びに連れて行ってくれる」0.24 ポイントの減少 (Mann-Whitney U 検定, $P=0.019$), 「一緒に遊びにでかけてくれる」0.36 ポイントの減少 (Mann-Whitney U 検定, $P=0.001$), 「一緒にいて楽しい時間を過ごしてくれる」0.15 ポイントの減少 (Mann-Whitney U 検定, $P=0.048$) であった。

ソーシャルサポートについては, 家族の同居がソーシャルサポートに影響しているかを確認したが有意な差が認められなかった。

男女では, ソーシャルサポート得点では実習前後ともに女性よりも男性のほうが高いが有意な差

は認められなかった (表 6)。

考察

1. 実習と学生の SOC

実習の期待度について 100 を満点としたところ平均 49.5 ポイントであった。実習の期待度は, 実習前の学習時間と正の相関がやや認められ, これは事前学習の時間が長い学生は, 実習への期待度が上がっていること示している。

しかし, 事前学習の時間と SOC の関連は認められず, 実習の事前学習は SOC の上昇に直接結びつくものではなかった。実習の目的と事前学習の結びつけが十分されていない時期での調査であったのか, 実習をイメージしての主体的な事前学習であったのかなどの確認ができていないことから, SOC の上昇につながらない要因を明らかにすることはできないが, 事前学習を行うことで実習への期待度が上がることから, 効果的な事前学習になるような教育的介入を行うことで SOC の上昇が期待できる。

SOC 合計や下位尺度の値は, 男女で, また年齢で変化し, 年齢が高くなるほど SOC の値は高くなるといわれている¹⁶⁾。山崎らの全国調査による SOC-13 の性, 年齢階層別標準得点と比較すると, 最低年齢が 25 歳~29 歳であるため学生の年齢よりも 5 歳ほど高いが, 男性 53.34 ± 11.43 , 女性 53.17 ± 11.64 である¹⁶⁾。本研究では, 実習前は標準得点より若干低い。ストレス対処力としてはやや低い状態で実習に臨む状態であるといえる。実習後には女性は実習前よりも上昇するだけでなく標準得点を超えている。これは, 実習の経験が自身のストレス対処力を向上させたといえるが, 男性にはみられない。これは A 大学の男性の人数が少なく個人差が影響していると考えられる。看護学生の男女比は 2017 年の時点で男性 12.1%, 女性 87.9%であり¹⁷⁾, A 大学の学生数の比率とほぼ同じであることから, 1 施設での調査では量的な判断は難しいといえる。

表 6. 男女別にみたソーシャルサポートの実習前後の得点 (n=72)

	実習前		実習後	
	男 (n=9)	女 (n=63)	男 (n=9)	女 (n=63)
ソーシャルサポート合計	65.11 ± 10.33	63.98 ± 9.88	64.56 ± 8.97	63.89 ± 9.91
評価的サポート	19.56 ± 3.88	18.27 ± 3.36	19.67 ± 3.12	18.76 ± 3.21
情報・道具的サポート	21.89 ± 4.78	21.95 ± 3.83	22.11 ± 4.76	22.22 ± 3.80
情緒・所属的サポート	20.44 ± 3.97	20.57 ± 3.04	19.44 ± 3.43	19.63 ± 3.36

Antonovsky はストレス対処に成功するためには、ある程度豊富な対処資源がその人に備わっているか、その人の周囲に存在しているかが必要条件である⁹⁾としている。本研究の実習前のSOCとソーシャルサポートは、正の相関が認められており、ソーシャルサポートが高いとSOCも高いことがわかる。ソーシャルサポートが充実していると学生が認識できる状態は、SOCを高める必要条件となる。Antonovsky は、さらに対処資源の動員力としてのSOCがその時までには育まれ鍛えられているのではなくてはならないとしている⁵⁾。成人前期(20歳頃～30歳頃)は、乳幼児期、思春期についてSOCの発達において重要な時期とされ、なかでも職業の果たす役割が大きいとされている⁹⁾。これは、学生が看護職者として成長するうえで必要な実習が、学生のストレス対処力を上昇させる機会であることを意味している。本研究で実習終了後の満足度が100を満点としたところ77.1±20.3ポイントとなり実習前の期待度と比べ得点が高いことや、実習後には前と比べてSOCの上昇が認められたことも併せて、実習が学生のストレス対処力を向上させるものであったといえる。

実習は、看護職としての自覚を芽生えさせるとともに自身の未熟さを感じさせるものであるが、患者とのコミュニケーションやスタッフ、指導者からの肯定的評価で満足感、自己効力感を得られる体験でもある¹⁸⁻²⁰⁾。SOCの発達は、成人前期にある学生にとって職業的な訓練に加えて、専門職者としてのアイデンティティや人間性の成長にもかかわるものととらえることができる。実習での学生のSOCを確認することは、実習評価とは別の学生の成長を確認する機会であるといえる。

2. 学生のソーシャルサポート

ソーシャルサポートについては、片受らの大学生(677名)の調査¹⁴⁾における結果では、男性よりも女性のほうが有意に高いとされているが、本研究では男性のほうが高い。また、合計得点及び下位尺度の合計点を比べると、片受らの調査結果はソーシャルサポート得点では男性70.75±11.82、女性78.36±10.79であり本研究結果よりも高い。下位尺度では、評価的サポートが男性29.78±5.93、女性32.83±5.63と本研究結果よりも高い。これは一般の大学生に比べて、本研究の対象学生が成果や努力に感謝されたり、労わられたり、評価されているという感覚を持っていないことを示す。評価的サポートは、自尊心サポート(self-esteem support)、もしくは尊重サポート(esteem support)とも称され²¹⁾、

「自分を認め、受け入れ、評価・尊重をしてくれる他者からのポジティブな情報」である。人から受け入れられているという感覚は、さまざまな適応指標と関連することが明らかになっている²²⁾ことから、大学生における評価的サポートが抑うつや不安感情などの不適応要因の低減に有用である可能性¹⁴⁾が考えられる。

本研究での実習前後の比較では、ソーシャルサポートの合計点が下降しているが、これは情緒・所属的サポートの減少が影響している。実習中は、記録の整理や翌日の援助の準備など自宅での学習時間も多くなる。気分転換をする機会や遊びに行くといったサポートを受ける機会が減ることから生じているものと考えられる。

評価的サポートは、有意な差は認められていないが、実習前と比べて実習後は男女ともに若干のポイントが上昇している。実習の中で努力の成果や期待を感じる場面があったことが推察されるが、日常的に評価的サポートを体感できるような教育的介入が必要である。実習の満足度を上げる要素として、教員や指導者による直接的なサポート²³⁾だけでなく、温かい雰囲気や精神的サポート²⁴⁾、指導者以外のスタッフの関わり²⁵⁾などの報告があり、ソーシャルサポートを充実するような教育的介入は、実習満足度を上げることにつながると考える。

結語

本研究は、A大学の学生のみを対象とし、実習前後での連結により分析対象数が少なく、男女比も異なるため一般化はできないが、A大学の基礎看護学実習における学生の実習にかかわる準備状態や実習中のSOC、ソーシャルサポートの実態を明らかにした。

学生のSOC合計得点、下位尺度の把握可能感、処理可能感、有意味感いずれも実習前と比べて実習後には上昇し、実習体験がストレス対処力の向上に結び付いている。SOCとソーシャルサポートは関連があり、ソーシャルサポートが高いとSOCが高くなる傾向があるが、実習前の評価的サポートは低い。A大学の学生のSOCやソーシャルサポートは標準得点よりも低い傾向にあり、学生が自身を肯定的にとらえることができる評価的サポートを意識した教育的介入が求められる。

利益相反

本論文内容に関連する利益相反事項はない。

文献

- 1) 文部科学省：大学における看護系人材養成のあり方に関する検討会 第二次報告 看護実習ガイドライン (2020 https://www.mext.go.jp/content/20200330mxt_igaku-000006272_1.pdf) (アクセス：2020年4月20日)
- 2) 坂本弘子, 福森利智子, 木村紀美：看護大学生における臨地実習が心理的 well-being に及ぼす影響. 八戸学院大学紀要 57: 173-83, 2018
- 3) 塚本尚子, 舩木由, 野村明美：看護学生のソーシャルスキルが実習直前のストレス低減に及ぼす影響. ストレス科学研究 25: 30-36, 2010
- 4) 金子さゆり, 樺野香苗：基礎看護学実習における看護学生のストレス因子構造と対処行動. 名古屋市立大学看護学部紀要 14: 51-59, 2015
- 5) 正村啓子, 岩本美江子, 市原清志, 他：臨床実習中の看護学生のストレス認知とそれを規定する日常生活関連要因の検討. 山口医学 52: 13-21, 2003
- 6) 山崎喜比古, 戸ヶ里泰典：第1章 ストレス対処・健康生成能力 SOC とは. ストレス対処力 SOC—健康を生成し健康に生きる力とその応用(山崎喜比古, 戸ヶ里泰典, 坂野純子, 編) 有信堂高文社, 東京, pp3-23, 2019
- 7) 山崎喜比古：ストレス対処能力概念 SOC の保健医療社会的含蓄とチャレンジ. 保健医療社会学論集 19: 43-55, 2008
- 8) 樺野香苗, 金子さゆり：基礎看護学実習における看護学生の SOC 変化とそれに影響するストレス要因. 名古屋市立大学看護学部紀要 15: 15-21, 2016
- 9) 米田政葉, 岩田直美：北海道内の看護学生における基礎看護学実習 II 前後での首尾一貫感覚の変化と実習関連満足度の関係. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌 15: 45-49, 2019
- 10) 山中政子, 平賀元美, 藤原尚子, 他：成人看護学実習を受ける看護学生の実習前から実習期間中の Sense of Coherence と精神健康度・身体症状・生活状況・社会的状況の推移と関連性に関する調査. 日本看護学教育学会誌 28: 1-11, 2018
- 11) 嶋信宏：大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに関する効果. 社会心理学研究 7: 45-53, 1992
- 12) 稲葉昭英, 浦光博, 南隆男：ソーシャルサポート研究の現状と課題. 哲学 85: 109-49, 1998
- 13) Antonovsky A：ストレス対処と健康保持のメカニズム. (山崎喜比古, 吉井清子監訳) 有信堂高文社, 東京, 2009
- 14) 片受靖, 大貫尚子：大学生用ソーシャルサポート尺度の作成と信頼性・妥当性の検討—評価的サポートを含む多因子構造の観点から—. 立正大学心理学研究年報 5: 37-46, 2014
- 15) 片受靖：新大学生用ソーシャルサポート尺度と精神的健康, 援助要請スキルの関連についての研究. 立正大学心理学研究所紀要 14: 65-70, 2016
- 16) 山崎喜比古, 戸ヶ里泰典：健康生成力 SOC と人生・社会—全国代表サンプル調査と分析. 有信堂高文社, 東京, pp43-59, 2017
- 17) 厚生労働省：第1回看護基礎教育検討会参考資料, 看護基礎教育を取り巻く現状等の参考資料, 2018 (<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10801000-Iseikyoku-Soumuka/0000203418.pdf>) (アクセス：2020年4月20日)
- 18) 岩脇陽子, 滝下幸栄, 今西美津恵, 他：早期体験学習としての基礎看護学実習の学習効果と実習満足度に関連する要因. 京府医大看護紀要 17: 31-39, 2008
- 19) マイマイティパリダ, 紙屋克子, 落合幸子：看護学生の職業的アイデンティティ形成の促進を目的とした実習直前指導の効果. 医学教育 38: 329-333, 2007
- 20) 山下 暢子, 舟島なをみ, 中山登志子：看護学実習中の学生が直面する問題—学生の能動的学修の支援に向けて—. 看護教育学研究 27: 51-65, 2018
- 21) 和田実：ソーシャルサポートに関する一研究 東京学芸大学紀要 1 部門 40: 23-38, 1989
- 22) 鈴木真吾, 小川俊樹：中学生における自尊心と被受容感からみたストレス反応・本来感の検討. 筑波大学心理学研究 36: 97-104, 2008
- 23) 辻村弘美, 柳奈津子, 金井好子, 他：基礎看護学実習における学生実習満足度と学生指導体制に関する考察—2011・2012 年度と 2013・2014 年度を比較して—. 群馬保健学紀要 36: 21-29, 2015
- 24) 九津見雅美, 富澤理恵, 新井祐恵, 他：A病院でのB大学看護学臨地実習における実習指導役割実施状況に関する調査—実習指導者・看護学教員の自己評価と看護学生の満足度から—. 千里金蘭大学紀要 9: 119-127, 2012
- 25) 佐藤未和, 塚越聖子, 坂入和也, 他：精神看護学実習における学生実習満足度に関する研究. 第44回 日本看護学会論文集 精神看護: 205-208, 2014

Abstract

**Students' Sense of Coherence and Social Support
Before and After Fundamental Nursing Clinical Practice at A University**

Motomi HIRAGA, Yukie ONISHI
Department of Nursing, Nagoya University of Arts and Sciences

Objective: This study aimed to reveal changes in sense of coherence (SOC) and social support among nursing students and suggestions for educational interventions in fundamental nursing clinical practice.

Methods: One hundred and five university students from A University in Japan, consisting of second-year students who experienced Basic Nursing Practice 2 in February. From January to February 2020. The Japanese version of SOC-13 to determine sense of coherence and using the Social Support Scale for New College Students, developed by Katauke and Oonuki was conducted before and after practical training. This study was approved by the Research Ethics Committee of the researcher's affiliation.

Results: Seventy-two (68.6%) responses were deemed valid as they could show connectivity before and after these courses. The SOC total was 51.74 ± 8.44 (mean \pm standard deviation) before practice and 53.65 ± 9.19 after practice, indicating an increase of 1.91 points after practice compared to before practice. A t-test was performed on the total SOC before and after the training, and a significant difference was found at $P=0.045$. The total social support was 64.13 ± 9.87 before practice and 63.97 ± 9.74 after practice, a decrease of 0.16 points. SOC and social support were slightly correlated by Spearman's test with $r=0.241$ before practice and $r=0.357$ after practice.

Conclusion: Stress coping ability can be increased through practical training. To improve stress coping skills, education that enhances appraisal support is necessary.

Key words: Nursing education, Nursing practice, Sense of coherence, Social support, Stress coping